フィンドレー大学への協定留学　月例報告書（2 月分）

静岡文化芸術大学 デザイン学部 デザイン学科 3 年 桑原大樹

一刻も早く、日本に帰りたい。留学 8 か月目に突入し、残り 2 カ月となってついに限界を迎えている気がする。普通、留学の報告書といったらもっと楽しそうなものなのかもしれないが、負の面だって立派な体験の一部である。みんなが書かないだろうから、私が書く。

2023 年 3 月 13 日。この報告書の締め切りを大幅に過ぎた日曜の昼下がり。界王星とも思えるほどの重力に逆らって体を起こし、キーボードをポチポチとやっている。最近はめっきり病んでしまい、長く正確な文章を書く自信が持てず、教務・学生室の人に事情を話して締め切りを先延ばしにしてもらった。病んでしまった理由については、先月の報告書に書いた内容で大方説明できる。要するに、ホームシックなのだ。日本食も、家族も、ペットも、友人も恋しい。長い間会わないうちに元々持っていた人間関係にも変化が起きていて、そこへの心労も無視できない。

日々を生きる「アメリカ」という環境もストレスだらけである。ちょっとした文化の違いでイライラしてしまう。この間、ついにアメリカでも公開した鬼滅の刃の映画を観てきた時の話だ。映画はよかったと思うが、なんというか、酷い体験だった。アメリカでは映画は静かに観るものではないという認識のようで、話す人、歌う人（？！？？！？！？！？）、前の座席を蹴る人、座席を揺らす人、立って鑑賞する人（！！？！！？！？！）、スマホをいじる人、電話をする人（？？！？？！？？！！？？？？？？！？？！？？？？）、と様々だった。背もたれを蹴られすぎて我慢ならず、あるタイミングでパッと後ろをふりむいてしまった。すると白人の男性が「What?」と、（これは思い込みかもしれないが）割と高圧的に言ってきた。怖かった。もしも差別主義者だったらと思うと、「蹴るのをやめていただけませんか」とすら言えなかった。ここまでの 7 か月で得た、私の感覚だ。外出すると疲れる。

他にも、スーパーでは、味見と言って勝手に袋を開けて食べる人もいる（許可されているわけではない）し、トイレは 3 割くらいの確率で流されていないし、バイキングでは食べ物を取るときあり得ないほどこぼすし、食べられもしない量を取って半分以上残すし、紛失物は 99%帰ってこないし、アマゾンの配達物は時々箱がボロボロだし。こういった「文化の違い」に 7 か月も経って全く適応できず、普通にイライラしてしまう。何のために留学しているというのか。

日本と距離がありすぎるのも問題だ。この半年、色々なことがあった。友人に任せていたペットが死に、小さい頃から仲良くしていた従妹が出産し、叔母が癌で亡くなったが、最後にペットの亡骸に触れることもなかったし、「おめでとう」と従妹に会いに行くこともできていないし、叔母の葬式に出席することも叶わなかった。加えて書けないようなこともいくつかあって、もはやメンタルはズタボロである。

しかし、どれだけつらくても、「貴重な体験をさせていただけている立場」は自由に文句

を言わせてくれない。「アメリカ留学なんて、誰でもできることじゃない。親にいくらかけさせたと思ってるんだ」と言われたら、返す言葉もないのだが、あえて正直になってはっきり言うならば、留学ってめちゃめちゃキツい。もちろん、行きたいなら行けばいいとは思う。成長はする。今の私は、アメリカ人と会話するのに何の躊躇いもない。ただし、覚悟は必要だ。生半可な覚悟では金をドブに捨てる。不味い食事に、湯船もなく、不潔なトイレの使用を迫られ、美味しくもない天然水 1 本に 250 円、仮に親が急に死んでも（距離次第だが）葬式にすら間に合うかどうか分からない。それでも自分のために海を渡るというのなら、留学はきっと良い経験になる。

　こうやって文句を垂れていても、時は止まらない。人生でまたとない経験のチャンスは、どんどんどんどん過ぎ去ってゆく。だからまぁ、つらくても頑張るしかないのだ。カラオケにも行けないし、居酒屋にも行けないし、一旦実家に帰るなんてこともできないけれど、とにかく毎日を頑張るしかない。残り 55 日。

この報告書には写真を載せないといけないが、うなだれている自分の画像は嫌なのでニューヨークに行った時の写真を載せておく。絶望の淵に立っているような報告書を書いたが、楽しいことだってある。